
Dear1963 From the U.S.A.

工藤 まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear 1963 From the U.S.A.

【Zコード】

N7327A

【作者名】

工藤 まりも

【あらすじ】

1963年、アメリカを大きく揺るがした事件があった。時代の陰謀が交錯するその時、リー・ハーヴェイ・オズワルドは何を考え、どう生きたのか。

上編（前書き）

この物語は史実に基づいたフィクションです。人物の行動、性格等、不確かなことをご了承ください。

「依頼イ？」

リーは黒スーツに身を包んだエージェントの醉狂な提案を信じる氣にもなれず、その上等そうな革靴に唾を吐きかけた。

「そう、依頼だ」

エージェントの男は表情をぴくりとも変えずに、重機の駆動音のような低い英語で事務的に答えた。

「バラエティ番組の依頼なら、プロデューサーに言いな」

冷たく言い放ち、背後の丸テーブルに置かれているスコッチウイスキーのボトルを手元のコップに傾けた。

「…お前のことは全て調べ上げた」

懐かしい響きだ。まさか、ロシア語？

スコッチウイスキーが丸テーブルの上に飛び散る。ボトルの口がコップを外れていることに気づくのに、暫く時間を要した。

「ソビエトの人間、なのか？」

無意識のうちにロシア語になっていた。男はやはり事務的に領いて見せてから、『ＴＤ』と呟く。

タクティクス・ドリル
戦略的狙撃部隊。リーが知らないはずがなかつた。彼自身、そこに所属していたのだから。

「ジョンソン副大統領の手の者か？」

リーはかつてTDの元締めだった人間の名前を口にした。1962年のキューバ危機の中で、フルシチヨフが核ミサイル撤去に至ったのは史実に語られている。だが、十月二十五日に行われた緊急国際安全保障会議の後、ジョンソンがTDの存在をソビエトに仄めかした密談とそれが撤去の一員になつたことは、恐らく永遠に語られないだろう。

TDのコンセプトは、その国の重要人物全てを一斉に射殺し、繕い

ようのない綻びを作ることにある。

すなわち、國家そのものを狙撃する。その銃口がソビエトの頭を捕らえていたのは疑いようのない真実だ。

だが、この部隊の存在に異を唱える人物がいた。

その人物によつてTDは解体、1959年からソビエトに潜入してTDのメンバー全員が亡命と扱われ、その中のほとんどが眞実の漏洩を防ぐために謀殺された。

リーは名前を変え、ソビエトの女を妻に迎えることで奇跡的に追撃を免れた。しかし、撮影の技術などない彼が近くのテレビ局で働いていたのはKGBの監視を交わす苦肉を策だつたし、妻のマリーナは他に男がいたことも知つていた。

まるで檻の中を這い回つているような毎日だった。だから檻を出された一年前には、職も妻も捨て去るのに、何の躊躇いも感じなかつた。

アメリカに感謝している、と言えば嘘になる。全てを擲つて国に归したTDのメンバーを、亡命者の汚名を着せた上でなぶり殺しにしたのだ。

「帰つてくれ。俺はアメリカに裏切られた。もう一度と信用するつもりはない」

TDの過去が喚起し、声に哀愁が響いた。

「しかし、オズワルド……」

「あんたに名前を呼ばれる筋合いはないし、俺はもうTDのメンバーじゃない」

リーはコップのスコッチウイスキーを勢いにまかせて煽つた。

「……あんたらが作つた、醜い掃き溜めさ」

ふと窓に目をやると、既に太陽が椰子の木から顔を出してテキサスの長い昼を告げていた。

リーは壁にかけてあるカーキ色の野球帽を深く被り、男がいる出口に歩いていった。

「もう俺には関係のことだ。道を開けてくれ」

男は動かない。

「オズワルド、話を聞け。お前が再び栄光を手に入れるチャンスをみすみす捨てるのか？」

「黙れ！ 何が栄光だ」

いきりたつて反駁してから、リーは卑屈な笑みを浮かべた。

「TDが消えた時点で俺は、この国を憂う生きたゴーストになっちまつたんだ。ゴーストにできるのは、過去を振り返り、思い出を憎むことだけだ」

苛々と首を振つてリーはさらに続ける。

「栄光と愛國心の影で、何千、何万という人間の悲鳴を上げている姿が、あの時は見えなかつた。いや、見たくなかったんだ。そして俺が影に入る番になつてはじめて、自分が崖の先で犠牲にした物の数に圧倒され、後悔した。遅かつたんだ、何もかも……」

感傷的になつたリーの言葉に、エージェントの男は頬を緩めた。同情か、あるいは皮肉か。

「ついてこい、オズワルド」

そう言い残してエージェントの男は玄関の扉を開けて部屋を出た。一人になつたリーは少しの間逡巡したが、覚悟を決めて扉に手をかけた。

外に出て 息を呑むのと扉が閉まるのは、ほぼ同時だった。

「オズワルド、君の立場が分かつてもらえたかな？」

AK 47 の突撃銃やらM 8 のショットガンやらざらりと構えてリーを囲んでいる黒服の男達の中で先刻のエージェントが懐から45口径の拳銃を取り出してリーに向けながら言つた。

「なんだ、そう言つ事か」

リーは声に出して笑つた。気が変になつたかもしれない自分でも思った。呆れたのではなく、また裏切られるという考えがすぐに的中して、それがおかしかつたのだ。

「主から断られたら殺せ、という指示が出ている。あの部屋で俺が右手を上げたら、すぐに突入できる手筈だつた」

淡々と語るエージェントの男を、リーは鼻で嘲笑した。

「脅しているつもりか？ 残念だが言つたはずだ。俺はゴーストだとな。ゴーストは生も死も関係ない。撃てといつ指示が出ているのなら撃てばいい」

だが、動物的な恐怖はリーの体を震わせていた。リーはなるべく表に出ないよう、気を引き締めた。

「脅しではない。お前に断られても代わりはいくらでもいる」「だったらなぜ……」

エージェントの男は手を 左手を上げた。その背後で銃が一斉に下ろされた。

「お前の話が、国を犠牲にした人間の声が、耳に届いたからだ」

一瞬、呆気に取られて自分がどういう状況に立っているか忘れた。エージェントの男は少し視線を下げて続けた。

「依頼を受けてくれ、オズワルド。俺はお前を殺してしまいたくな
い」
その声にはどこか懇願する響きがあった。リーは先刻までの恐怖が背中から抜けていくのを感じた。だが、作為的な何かも同時に感じ取っていた。

「これを見て欲しい。それでも駄目なら、諦めよう」

諦めるとは、依頼を、ではなく、リーの命を、だろう。再び戻ってきた戦慄に喉が鳴った。エージェントの男はリーの思いなど気づかぬ様子で、黒服の一人に目をやつた。それが合図だったように、黒服の男が足元のトランクに手をかけ、開けた。

その中身を見て、リーはもう少しで声を上げそうになつた。

カルカノM1938、TDに所属していた頃のリーが愛用していた狙撃銃。追撃を振り切るために燃やした銃が、目の前にある。

リーは体中の力が抜け、その場に崩れ落ちた。銃の手入れをしていた時に嗅いだ、油と鉄と血の臭いが思い出と共に強く鼻を打つた。

TDの思い出が蘇つてきた。それだけでむせ返りそこに懐かしかった。

また、輝けるのか？

また、国に近くせるのか？

また、昔に戻れるのか？

「依頼を受けよう……」

声がつまり、それしか言えなかつた。エージェントの男は満足げに領いて見せると、黒服の男達の背後に停まつてゐるセダンタイプの車に乗るよう促した。

「で、目標は誰なんだ？」

平常心を取り戻し、車に乗り込みながらリーは聞いた。質問を向けられたエージェントの男は運転席に乗つてドアを閉めながらにやつと笑つた。

「この国、この世界で一番顔がでかい奴さ」
軽い音と共に、ドアの鍵がかかつた。

2

四年前の秋、リーはソビエト潜入のために準備をしていた。特に愛銃、カルカノにはベアリング一個にまで念入りに手入れをする。暴発、不発は例え偶然にしてもワンショット・ワンキルのT-ロの世界では通用しない。

部品を抜いて空になつたカルカノの銃身を、いつものようにいとおしげに撫でる。不幸な偶然を防ぐためのおまじないで、これをやつて不幸な偶然に出会つたことは一度もなかつた。

窓はしっかりと閉めていた。風で部品が飛んでしまうからだが、鉄と油と、今までに消した人間の血の臭いが室内に充満させているのは自分のためでもあつた。

血肉に植えた殺人狂にならないための、自分への戒め。

「オズワルド、入るぞ」

返事を待たずに、扉が乱暴に開けられる。リーは眉間に皺を寄せた。

「部品を踏むなよ、ジャック」

危うく踏み壊しなくなつた部品に気づいて、ジャックはそれを

またいた。

「また例のおまじないか？」

無精髭に隠れた口元が揶揄するように曲がった。

「からかうなよ。こんな事をせずに済むぐらになら、わざわざ分解する必要もないさ」

肩をすばめてリーが言つと、ジャックは陽気な声で笑つた。

「なるほど。違いない」

リーもひとしきり笑いながら、部品を組み立て始める。ジャックもそれを手伝つた。

それから暫く、二人は無言で銃を組み立てた。

「しかし、何でカルカノを選んだんだ？ 弹の威力も耐久力もレミントンの方が上だろ？」

ジャックは心底不思議そうにしていた。彼はレミントンM700を使つていて、彼にとつてそれが一番なのだろう。

「アメリカの狙撃銃は、何て言つか、粗暴すぎるんだ」

リーは組み立てていた手を休めて天井を見上げた。

「どういう事だ？」

自分の愛銃をけなされて不機嫌になつたジャックが言つた。

「上手く言えないけど、銃の概念が違うと思う。アメリカは撃つた弾を勢いにまかせて目標に押し込んでいる

「当然だろ？」

「それが、違うんだ。例えば火薬の少ないアジアでは、その分だけ回転数を上げようとする。その場合は、弾を捻じ込んでいるんだ」感心したような表情がジャックの顔に浮かんだ。

「任せに叩き込むだけでは通用しないという事か」

「そうだな。でも、弾の回転数がある銃は基本的に非力だ。俺は両立できる銃を探した。結果が、これさ」

リーはそう言ってカルカノを持ち上げてみせた。

「お前がソビエト潜入に選ばれた理由が分かつたような気がする」

「つまり、レミントンを使つていい限り、お前はずつとマフィア止

まりつて事さ」

真剣そうなジャックの顔が面白くて、リーは軽口を叩いた。たちまち、いつものジャックに戻った。

「所詮は重い銃が持てないだけだろ?」

恰幅のよさが際立つ腹を揺すつて笑う。リーも大口を開けて氣の済むまで笑った。

*

ジャック、元気にしているだろうか。

リーはかつての友を想つた。メキシコの道はひたすら単調で、三時間ほど前から風景が何も変わつていない。

ジャック・ルビーはマフィアから成り上がりのTDメンバーだったが、リーがソビエトに潜入してから消息がつかめていない。

リーにとつてはあの陽気な語り口から飛び出す冗談がTD時代にどれだけ助けになつていたか、今頃になつて気づき、また聞いてみたいと思つた。

運転手のエージェントの男 ジエファーソンと名乗つた男にジャックの安否を尋ねると、彼は、マフィアに戻つてゐるらしい、とだけ答えた。それを聞いて、とりあえずは安心した。

それから、後部席のシートに背中をあずけると、小刻みで不規則な揺れに閉口しながら目を閉じた。瞼の裏に疲労が滲んだ。

どれだけ揺られていたかわからない。次に瞼を開いた時は既に目的地についたらしく、ジエファーソンはハンドルから手を離していた。

「疲れたか?」

ルームミラー越しにさすような視線を送つてくる。

「ああ。少しな」

リーは言葉を濁してから欠伸をした。正直、国境警備隊の連中を黙らせるために偽造パスポートとビザまで用意していたことに愕然としていた。メキシコとアメリカの国境はその長さ故に警備が薄くなってしまう。だから一国間の密輸と密入国があきれるぐらい盛ん

だつた。

リーはその尻馬に乗るとばかり思つていたのだが、ジェファーソンの背後にいる組織は神経質なほど慎重になつてゐるようだ。

同時に、この暗殺の成功にどれだけ心血を注いでいるか垣間見た気がした。

ジェファーソンはリーの態度が瘤に障つたのか、不愉快そうに鼻を鳴らして、運転席のドアを開けた。

「少し歩くぞ」

彼はぶつきらぼうに言い残すと、リーが車を出るのも待たずにさっさと行つてしまつた。テキサスより残忍な太陽の光に、リーは口を歪めてエージェントの背中を追つた。

陽炎があちこちで揺れていた。

テキサスで暮らしていたリーも一時間近く歩き通しで根を上げ始めた頃になつて、やつと人造物が見えてきた。ジェファーソンがたまたま疲れを吐息に混ぜながら、地面に擬態しているような土氣色の家屋を指差した。

「蜃気楼じゃないよな？」

「冗談のつもりが、嘘にもならなかつた。

「そう信じたい」

返答するジェファーソンの口調もどことなく重かつた。

幸い、その家屋は蜃気楼ではなかつた。近づいてそれを確認したリーはほこりっぽい扉に手をかけて、一息に押し開けた。扉の右上で、小さな鐘が乾いた音で客が来た事を伝えた。

中は丸テーブルと椅子が乱雑に並べられていて、一見すると西部開拓時代のバーのような印象を受ける。

ただ一つ違うのは、ひなびたカウンターの奥から金属を溶接する音が聞こえるぐらいだが。

間髪を入れず、そのカウンターの奥から中年男が腰を叩きながら現れた。無精髭と髪の毛が境目もなく顔を覆い、機械油と鏽の臭いを部屋の入り口に立つてゐるこつちにまで漂わせ、度の強そうな眼

鏡の奥に怪しい光を湛えている、一言で形容するなら「粗暴」。それ以上の言葉は要らない。

「よお。お前も老けてきたな、オズワルド」

「あんたは永遠に変わらなさそつだよ」

リーの皮肉に男は、そうかもしれないと笑った。

「TDの解体には驚いたよ。この辺じゃあ、毎日のようにあいつが死んだ、こいつが死んだって噂が飛び交っていたからな。お前も死んだと思っていた。だが、生きていて良かつた」

「そうだな。ところで、銃の仕上がりはどうだ？ カルカノM1938なんてマイナーな銃、いじるだけでも一苦労だったんじゃないか？」

リーがからかうと、男は大げさに溜め息をついた。

「無茶な注文してくれたよ。薬室はレミントンと交換しろだの、カービンのスコープをつけろだの、銃口のライフルは日本の九九式にしろだの、設計図を見て腰を抜かしそうになつたわ」

「TD時代の銃がその設計図から生まれたからな。瓜二つとは言わないまでも、なるべく近づけておきたかった」

「生意気なことを言うな。少し待つていろ」

男は肩をすぼめておくに引っ込むと、ジェファーソンが難しい顔をしてリーに耳打ちした。

「あの男、オディオと言つたか、奴は大丈夫なのか？」

信頼できるのか、という意味だろう。リーは口元を緩めて答えた。「奴とはTD以前の付き合いだ。大丈夫、奴の腕は一級品だ。もつとも、おつむのほうは型落ち品だがな」

ほどなくしてオディオと呼ばれた男が、手にトランクケースを抱えて出てきた。それを手近なテーブルに載せると、リー達を手招きした。

「九九式の在庫がなかつたから三八式にした事以外は設計図どおりだな」

トランクケースから改造されたカルカノを取り出して、リーに手

渡すと、オディオはカウンター席の丸椅子に座つて自分の肩を叩いた。

リーは感嘆で息を呑み、呆然と銃身を見つめた。テキサスの日々で想い続けた銃が、あの時ままで手に乗っている。何もかも昔に戻ったような感触が体を包んでいた。

「標的は大体察しがつく。必ず成功させてくれ、オズワルド」「オディオが呟く。リーは入り口の扉に向けて銃を構えると、銃身に頬を寄せてスコープを覗いた

「ああ。約束する」

そう答えたとき、スコープの向こうで標的の影が浮かんだような気がした。

TDの敵を今なら討てる。待つていろよ、ケネディ
リーは引き金を引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7327a/>

Dear1963 From the U.S.A.

2010年10月13日05時49分発行